

旅する喜び あなた仕様にく

シニア向け

株せんがプランニング
代表取締役社長 花川和久さん

オーダーメイドツアー

年を重ねると健康上の制約や、計画・手配の煩わしさで個人旅行が難しくなります。団体の企画旅行は申し込みは楽ですが、ついていけるか、他の人に迷惑をかけないか不安に思うことも。そんなシニア層にオーダーメイドの旅を提供してくれる旅行社があります。

行きたいところ、どこへでも

20坪ほどの店内に女性物の洋服やキャリーバッグが陳列され、カウンターには企画旅行のパンフレットが並ぶ。「ブティック」と「旅行社」が一体となった「ブティック&らくじゅツアーせんが」は、旅行の申し込みと、旅を楽しむ洋服やトラベル用品の購入が一度に済むと評判のお店です。らくじゅツアーの一番の売りは「シニア向けオーダーメイドツアー」。個人の細かな要望に応え、思うように身体が動かせない高齢者にも満足のいく旅を提供しています。

たとえば遠方の身内や友人に会いに行く、お墓参りに行く、思い出の地を巡る。これらをオーダーメイドで組んで添乗し、単なるタクシー移動とは異なる「旅」を提供します。また、外出が難しい高齢の親や、おじいちゃん、おばあち



御年100歳で旅を満喫



やんに旅行をさせてあげたい家族には、介護技術と旅の業務知識を備えた「ヘルパー添乗員」が帯同しサポート。他社のバリアフリー旅行と比較した、同社の強みとは？

「バリアフリー対応の観光地や施設だけを組むのが一般的なバリアフリー旅行。一方私どもは、ご本人が行きたい場所がまずありき。そこがバリアフリーでない場合に安全な方策を考え、必要な準備をします」

自社所有の介護装備付タクシーで、道中トイレ休憩も気軽に取れ、大型バスが入れない目的地付近まで寄せることができます。さらに、プロのヘルパー添乗員が同行すれば、要介護認定5の方の旅行も可能です。

起業に込めた思い

花川さんは百貨店で外商担当をしていましたが、バブル経済崩壊後は徐々に顧客が減少。景気悪化に顧客の高齢化が追い打ちをかけたといいます。

「高齢になると家に引きこもりがち。でもよく話を聞くとお洒落や、旅行への興味は変わらないんです」

シニアに外出の機会や、お洒落をする場を提供したい、



マイカー規制のある上高地も、タクシーで楽々到着

が出来た、と本当に喜んでいただけました」

これからの夢

これから力を入れたいことが二つあるといいます。一つ目は着地型観光で外から人を呼び込むこと。リビート客から大阪の親類男性のサポートを依頼された事がきっかけでした。戦時中親類を頼り疎開した関市をもう一度訪れたいという男性の為に、当時の疎開先を訪ね、親類の墓を参る企画を組むと大変喜ばれたそう。

「昔岐阜に住んでいた、親が岐阜出身、など日本中にいる岐阜ゆかりの人々に、岐阜の観光+自身に縁の地を巡る旅を提供したいですね」

この事業の本格化に不可欠なのが「ヘルパー添乗員」。今が必要に応じて東京から来てもらっています。

「ゆくゆくはこのヘルパー添乗員の育成を弊社でできないかと考えています。地元で資格を持つ人が増えれば、たくさんの人に岐阜を楽しんでいただけますから」

二つ目は、地元の人々に向けた「お買い物応援と食事のセットツアー」。食事と生活必需品などの買い物物を2箇所ほど回り、自宅まで送り届ける。ワゴンタクシーに5〜6名乗り合わせで、毎日運行させるのが目標です。「認知症の方は旅によって心と脳が刺激を受け、とても活発になるんですよ。非日常のちょっとした楽しみを定期的に取り入れて、人生を豊かなものにしてもらえれば」

高齢化が進む現代社会では、シニアが元気に毎日を過ごすことが若年層の生活にも好影響を与え、社会全体の活性化にもつながります。同社のサービスが多くのシニアを元気にしてくれる事が期待されます。

と42歳で百貨店を退職し、旅行業とタクシーの許可取得の準備に2年を費やしたのち、母親が営むブティックの一角で事業をスタート。前職の顧客やブティックの常連客に対し、近場の送迎から始めました。「例えば病院の診察後に娘さんと食事し、昔住んでいた地域を訪ねるコース。日常にちょっとした楽しみをプラスすれば立派な「旅行」になるんです」

人生に寄り添う旅

旅の一つ一つに人生の物語があり、そのお手伝いが出る事が嬉しいと話す花川さん。中でも思い出深いのは、数年前に愛知に住む70代男性の旅をお手伝いした時のこと。男性のオーダーで、東京で会社勤めをしていた頃の同窓会に出席後、故郷の茨城県へ帰省、その後震災の爪痕が残る東北で人々を元気づけたいと各地を周りました。脳梗塞による半身マヒで車いすを常用している為、花川さんとヘルパー2名が同行し、入浴介助によって温泉も満喫されました。

「この旅からほどなくして茨城のお姉さんが亡くなられ、最後に良い思い出を作ること



南三陸鉄道のみなさんと